

チェルノビイリ、ドイツ、フクシマの真実は？

Tschernobyl Deutschland Fukushima – Auf der Suche nach der Wahrheit

チェルノビイリ事故以後、旧東ドイツ政府も旧西ドイツ政府も、ドイツ住民にその惨禍とそれによって見込まれるドイツに対する影響について客観的情報を全く与えようとしなかったことが、早くから明らかになった。ただ、ドイツの原子力発電所の稼働を望ましくない結果から守ることだけ、農業や貿易の損失を防ぐことだけが、唯一の関心事であった。

旧西ドイツでは、そのため住民に原子力の基本知識を教える教授が現れた。市民によって運営され、資金が出された食品をチェックする放射能測定所が生まれた。

旧東ドイツの独裁政権の下、そのようなことは不可能であった。科学研究所の測定器具が常にしまって鍵をかけられたので、数少ない放射能専門家は自らで独立した測定に利用することができなかった。政府によっても測定値が公表されることがなかった。旧西ドイツのデパートのために栽培されていたサラダは、旧西ドイツによって受け取られなくなり、代わりに旧東ドイツの学校給食メニューに上がった。

旧東ドイツ政府による意図的な偽りの情報政策に対する批判は、キリスト教会の内部のみ可能であった。特にプロテスタント教会では広く普及した、原子力に批判的な書物が出来上がった。すべてのキリスト教の教派が参加したあらゆる社会問題を扱った非常にオープンな議論の場としての「エキュメニカル集会」(Ökumenische Versammlung、1986年～1989年)は、その頂点となった。旧東ドイツのエネルギー政策は一つのテーマであった。そこからは次の明確な発言が生まれた。「原子力エネルギーは我々将来のエネルギー供給基盤であってはならない。私たちはこうした技術からの離脱への努力を避けて通ることのできないものだと考えている。核エネルギーに対する現在の姿勢を固守する時間が長くなればなるほど、再生可能なエネルギー源の開発に必要な資金を調達しにくくなる。」それと同時に旧西ドイツにも「エキュメニカル集会」があった。ただし、比較できるような枚描くな態度決定はそこには無かった。それは旧西ドイツの教会における政治界・経済界との結びつきのためであった。

1989年の平和革命には、理性にかなったエネルギー供給の問題と核エネルギーへの固執は重要課題であった。旧東ドイツで稼働されたロシア式原発のすさまじい安全状態についての極秘報告書入手することが可能になった。数か月内、運転中の原発6基が停止され、また5基の工事現場が放棄されたことには、このような最も重要な事実の公表も貢献したのである。

核エネルギーに対する批判は、旧東ドイツに配備されたロシアの核兵器から始まっていた。それらの核兵器のテーマはしかし、タブーであり、触れてはいけなかった。直接議論することが不可能であった。ただし、核兵器一般の結果について大衆を啓蒙することは、非常に望ましくないことではあったが、禁止することができなくなった。アメリカの核兵器だけの話ではないということが、だれにでも理解することができることでもあった。

このことと直接に繋がっていたのは、ウラン鉱山の採掘に対する批判であった。ウランの鉱業は旧東ドイツではロシアの監視下、論外の労働条件のもとで、第2次世界大戦後の賠償行為として促進されたが、まずは、ただロシアの核兵器の材料調達のみが目的であった。ウラン鉱業による約3万人の被曝者を覚悟する必要がある。後になって、ウランの一部が原発のための核燃料の形でソビエトから戻ってくることになった。

チェルノビイリ後特に不愉快であったのは、旧東西ドイツの優秀な専門家の多くが非常に似た形で事故の惨禍を過少評価したということである。旧東ドイツで政治的結果を不安がり、またチェルノビイリ原発が爆発して当本人ソビエトという兄貴分の独裁者をそれよりもっと恐れた研究者が十分にいたというのは、独裁政権の下では理解できるものであった。ただし意外なことには、民主主義的で自由の西ドイツの研究者も同じ態度を取った。彼らの評価は、ただ客観的に間違っていたことだけではなく、それよりもむしろ重要なことは、旧西ドイツ政府によって、こうして重大なことを些細なことに見せかける評価をかんがみて医学的援助をしなくてもよい、という好機の論拠として歓迎されるようになった。

東西とも、民主主義政府であれ独裁政府であれ、今日に至って、核エネルギーや放射能防護、放射能結果などに取り組むすべての国際委員会には核産業に対して忠実に心服している専門家層が優勢力である。こう考えてみれば、チェルノビイリ事故の25年後も、本来なら責任をもつはずの委員会による放射能結果についての客観的報告がまだ無いということが、説明可能なものになる。チェルノビイリ事故後の多様な健康障害を「放射能恐怖症」のせいにしてしまうということは、特に悪意に満ちた態度に感じる。例えば、チェルノビイリ地帯の人々が病気になった原因は、ただ外に出る機会が減ったから、新鮮な野菜を食べる機会が減ったからだけであるという発言。彼らを病気にしたのは、放射能そのものではなく、放射能恐怖によって起こされたヒステリーだけだという発言。また、彼らに何らかの被害を起こしてしまうには、放射線量があまりにも低すぎたという発言。西ヨーロッパにさえも重大な健康障害があったということが、チェルノビイリ事故後についても現在についても、近年、多くの研究調査で証明された。西ヨーロッパにおける比較的到低レベル放射能汚染が、検出できるほどの影響を及ぼしたことを、それらの調査が感銘深い形で裏付けている。何十万人も被曝している。そのほとんどは子どもである。

チェルノビイリ事故以後ドイツ住民は「専門家」、核問題に携わる政治家を十分に信用することができなくなった。旧東西ドイツとも市民はそれぞれ、非常に異なった形ではあったが、自分の子どもの健康をできるだけ守るため自らが専門知識を取得しないといけないということがわかった。ドイツにおける現在の保守派政権にとって、フクシマの後核エネルギーから離脱する本来の理由は、住民のこうした批判的基本態度であった。従来の原子力推進政策を継続した場合、次の選挙勝利を獲得できないということを正当にも恐れていたわけであった。ある意味では、脱原発の理由は理性では捉えられないものであった。フクシマは理由ではなかった。むしろチェルノビイリ惨禍の後で起こった市民による長年の熟考であったのである。

劇作家のベルトルト・ブレヒトは1938～1939年、オットー・ハーンとリーゼ・マイトナーによる核分裂の発見のすぐ後、亡命先デンマークで「ガリレイの生涯」(Leben des Galileo Galilei)を書いたことは注目すべきところである。その核心をなすメッセージは(市民に奉仕するのではなく)権力に奉仕する科学者の問題を次のように表現している。「真理を知らないやつはただの馬鹿者だ、だが真理を知りながらそれを虚偽というものは犯罪人だ」(Wer die Wahrheit nicht kennt, ist nur ein Dummkopf. Aber wer sie kennt, und sie eine Lüge nennt, der ist ein Verbrecher.)

2011年10月、日本にて

セバスチアン・プフルークバイル博士(理学) (Sebastian Pflugbeil, Dr.rer.nat.)
放射線防護会会長(Präsident der Deutschen Gesellschaft für Strahlenschutz)
大臣(退官), ベルリン市議会議員(退職)孫7人の祖父